

黒島・道下地区の葬儀

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23893

10. 黒島・道下地区の葬儀

榊 亜里沙

1. はじめに
2. 道下地区の葬儀
3. 黒島地区の葬儀
4. 現代における変化
5. おわりに

1. はじめに

黒島地区と道下地区で行なった7日間の聞き取り調査の中で、地域の方々から地区での生活や行事に関する様々なお話を聞かせていただくことができた。黒島・道下地区の方々には本当に感謝の念につきる。私は今回その貴重なお話の中から元々興味があった葬儀の手順について注目することにした。黒島・道下地区では葬儀をどのように行なってきたのか、また今現在その形態がどのように変わったのか、聞き取りで得た情報を元を書いていきたいと思う。

2. 道下地区の葬儀

葬儀は「枕経」「通夜」「内葬礼」「野葬礼」「火葬」と進んでいくのだが、その進行についてAさん(81歳男性)の話を中心に道下地区の方々から聞いた話を参考にして、葬儀について書いていきたいと思う。まず家族の者が亡くなりそうになったときについて述べる。人が亡くなりそうなときは、真言宗の宝泉寺まで「死に水」を取りに行ったそうである。死に水は和紙に含ませて、亡くなりそうな人の口に含ませる。この行動によって、静かに楽に死ねるとされている。この亡くなる直前の行動は家によって違うようであり、Bさん(81歳男性)の話では、このようなとき宝泉寺まで「土砂様」と呼ばれる海の底にある砂にお経をあげたものを取ってきて、これをこして亡くなりそうな人に飲ませたりしたそうである。こした砂は川に流したそうだ。この宝泉寺の

ことを道下地区の人たちは「ごまんど」と呼んでいる。

次に人が亡くなると、その家族はすぐ檀家のお寺にこのことを知らせに行く。この知らせる行為は親戚や近所の人に頼む場合が多いようである。このとき、「おぶくまい」と言って紐のついた袋にお米を一升または二升入れたものを持っていく。このとき、袋の口は閉めない。知らせを受けたお坊さんはすぐにその家へ出向いて枕経（亡くなった人の傍でお経を読む）を行なった。晩に人が亡くなった場合は翌朝改めてお坊さんが家に出向き、葬式の日取りを決めた。

亡くなった直後から遺体は白い布で覆われ、北枕にして布団に寝かせられた。布団の上には魔よけのために鎌など刃物がおかれた。そして傍には小さい屏風を逆さまに立てた。この屏風は誰かから借りたものでもよいとのことである。遺体の横には机を置いて、その上にロウソクと線香とりんと呼ばれる小さな鐘を乗せた。このロウソクと線香は、葬式が終わるまで絶やさないように、消えかかったら新しいものに変えた。また、遺体のことは「ガイ」と呼んだ。

お通夜前の15時頃になると家の者と親戚は「ユガン」を行なった。ユガンはガイの体を綺麗にする作業である。綺麗にするといっても水で全体を洗うなどという大掛かりなものではなく、綿にアルコールをつけて顔を拭いたりなどする程度である。ユガンの間は線香が灯され、りんが鳴らされた。

ユガンが終わると喪主はボロ着（山着）を着て、縄の帯を付け、ガイを棺おけに入れた。昔の棺おけは座棺というおけの形をした棺おけであったので、ガイを棺に入れるときは足を曲げて三角座りのような格好にして棺に寝かせた。手は合掌の形にした。このとき棺とガイとの間に空間が出来てしまうので、棺を動かしたときガイも一緒に中で動いてしまうのを防ぐため、棺とのすき間に豆、またはうや藁を入れた。これらの詰め物には火葬の際にガイを燃えやすくしてくれるという効果もある。豆などをいれるときは棒でギュウギュウに押し込んだものであったが、その様子は身内のものにしてみたら亡くなった人が可哀想になるほどであったそうである。

お棺にガイを入れた後、喪主は服を全部脱いで、ガイを寝かせていた布団なども一緒に全部丸めて、河原で燃やした。これはガイが穢れたものだという考え方からなされている行為だと思われる。

お通夜

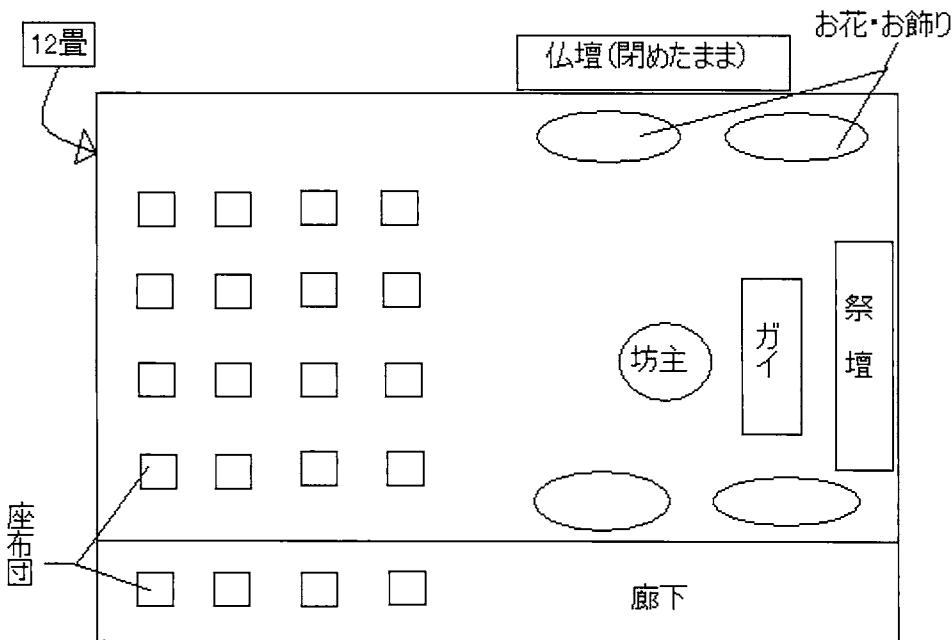
昔の道下地区では冠婚葬祭、特に葬式は自宅で行なわれることが主流であり、お通夜も自宅で行なわれるのが普通であった。葬儀を行なうときは皆が集まれるような広い空間を作るために、家のふすまは全てはずして一間にした。

葬儀は、親戚一同が協力して準備をした。まずお通夜の必要なものとして、金、銀、白の紙で出来た蓮を業者に頼んで作ってもらった。そして四花と呼ばれる白い花を4本用意した。花は花

屋で買ってくるなどして用意した。これらを飾る台は自分たちで作った。またロウソクを立てるための台は火葬場の近くにある小屋から借りてきた。これらの仕事は全て男が行なった。

用意した蓮と四花は棺の両側に立てられた。ロウソクも7、8本ほど両側に立てられた。例として、聞き取りを行なったCさん（女性、74歳）の母親が亡くなったとき（1985（昭和60）年）の部屋の配置は下図のようであった。

図1: 道下地区での葬儀の配置



お通夜のときには檀家寺の住職一人に来てもらってお経をあげてもらう。読んでもらうお経は宗派によって違う。例えば浄土真宗ならば正信偈と呼ばれる経であり、禅宗であれば般若心経である。昔はお経の間、廻し焼香という形の焼香がなされ、おぼん2つか3つを皆で廻していって焼香をした。焼香の際、お賽銭として100円を入れた。

お経が終わった後、法話が行なわれたが、これは住職によってやる場合とやらない場合があった。このとき禅宗では短くても法話になるそうである。そして喪主の挨拶が行なわれる。

お通夜のときは皆夕食を済ませてから来るので御膳は出ないのであるが、最後に司会者は「飲み物の用意をしておりますので…」と誘いをかける。しかし残るのは濃い親戚や近所の人ぐらいであり、ほとんどの人はここで帰る。残った人たちはビールやつまみをいただく。つまみは女性

が用意したものである。

その後家の者は一晩中ロウソクと線香の火が消えないように見張った。昔はロウソクが小さく、すぐに消えてしまいそうになるので、寝ずに交代でおもりをした。

本葬

本葬も親戚一同で手伝う。本葬では御膳を振舞うことになるので、女の人は葬式の前日、当日に食事の準備をした。昔は自分たちで食材を買ってきて、150人前ぐらいを用意していた。葬儀は昼に来る人が一番多く、かつては昼も夜も料理を振舞ったそうである。このとき使われる食器は「カグ」という輪島塗の食器であった。たいていの家の人はこれを持っていたそうである。

また葬式に使うものとして、花団子、仏飯を用意した。花団子は団子を竹串に刺し、花のようにしたたものである。仏飯はご飯に箸を挿したもので、箸を1本挿す場合と2本挿す場合があり、ご飯は山盛りにして、食器は普通のものをつかった。

香典は昔は赤飯(1櫃)やもち米(4升)、小豆(1升)などがお悔やみとしてもらえた。赤飯は濃い親戚、兄弟などが香典としてもってきた。濃い親戚は「ゴショビツ」として、米とロウソク代を出したりもした。

本葬になると道下の二ヶ寺である本勝寺と宝泉寺の住職も家に呼んだ。二ヶ寺の住職に加え、檀家寺の住職の3人ほど呼んだ。道下地区で檀家が一番多いのは、黒島地区にある福善寺である。黒島地区には福善寺、永法寺、名願寺と3つの寺があり、それぞれ「たかのごぼう(福善寺)」「うらのごぼう(永法寺)」「なかのごぼう(名願寺)」と呼ばれる。道下で福善寺の檀家は70軒であり、永法寺の檀家も12軒ある。そして、本勝寺と宝泉寺の檀家である家はそれぞれ50軒ほどである。

また檀家の住職の他に、お経を読む手伝いをする諷経(ふげん)のお坊さんと呼ぶ場合がある。諷経のお坊さんは濃い親戚がお寺の住職である場合に来てもらうことが多いようである。この場合、お布施は読んだ家の人が出した。

本葬はまず「内葬礼」から始まる。お通夜のときのように家のふすまをはずして一間にして、お経を読んでもらった。このとき焼香をするのは女の人だけであった。

内葬礼が終わった後、お棺は外に運び出される。昭和のはじめ頃はお棺を輿の中に入れて4人でかついだ。輿は火葬場の近くにある物置に置いてあるものをもってきた。そして旗を持って行列を作り「野葬礼」の場所まで向かった。1939~1940(昭和14~5)年頃には生活改善によってこの輿は滑車付のものに変えられて、輿はかつぐのではなく引いていく形になった。この行列には遺族のものは加わらなかった。遺族は火葬までの間はずっと部屋で待っていることになる。

「野葬礼」は内葬礼とは対比して文字通り外で行なわれる葬礼のことである。野葬礼は現在道

下地区の公民館がある場所の近くで行なわれていた。野葬礼の場所には土を盛った祭壇があり、その大きさは5メートル四方で高さは50センチほどであった。この上にお棺を置いて、お供えをした。そしてお坊さんにお経を読んでもらった。

葬儀の一番の中心人物を「導師」と呼ぶが、禅宗の場合は一番偉いのが監院、その次に位置する訓寺、そして修行僧が最低3人はつく。修行僧が3人以上必要なのは「ちんどんじゃばん」をするためである。ちんどんじゃばんというのは、ちんは鈴の音、どんは太鼓の音、そしてじゃばんはシンバルの音を表しており、これら3つの楽器の演奏を表した言葉である。このちんどんじゃばんは野葬礼のときだけ行なわれ、内葬礼のときには修行僧は何も行なわない。

火葬

野葬礼が終わると、輿を中心とする行列は火葬場へと向かった。火葬場へ向かう間の道すらは、田んぼのところどころの竹に白い紙を切ったものをはさんでいった。これは道案内のしるしの役割であった。

昔火葬場は勝谷川を越えた辺りにあった。この火葬場は1963（昭和38）年にはまだ使っていたらしいが、1970（昭和45）年ぐらいになると、門前と穴水の共同の火葬場の方まで歩いて行くようになった。その距離は25キロと結構な道のりであった。また、昔の火葬場の近くには小学校があった。Aさんは「小学校の窓から火葬場に行く様子が見えて、授業中よくみていた」とおっしゃっていた。この昔の火葬場は今墓地になっていて、地藏様がたてられている。これとは別に、古くからある道下の墓地はその場所からさらに上に登ったところにある。また、火葬場のことは「ビョウショ」と呼んだそうである。

火葬場には昼頃に着いた。着くとまず、お坊さんがお経をあげた。行列に参加し火葬場までやってきた人たちの中には男女両方が含まれているが、このとき焼香をするのは男だけである。火葬場はまでは親戚なども行列に参加していくが、火葬を行なう係はあまり血縁の濃くない親戚や近所の人の数人であった。この人数は大体4〜5人程度である。Dさん（76歳男性）にから聞いた話では、この火葬をする係のことを「おんぼさん」と呼ぶそうである。先ほどの、火葬場まで向かう行列で輿を担いでくる仕事もおんぼさんが行なう。

おんぼさんの仕事は内葬礼のときにも願いをして引き受けてもらう。お願いする人物は上に書いたように、あまり血縁の濃くない親戚や近所の人である。おんぼさんの仕事は決して楽しい役割ではないのだが、自分が死んだときにも誰かにこの役割を頼まなくてはいけないものなので、断ることはできないそうである。おんぼさん以外の人はここで家に戻った。

火葬のとき、おんぼさんがガイを運ぶ道には竹の先にロウソクをつけたものが立てられた。これは冥土の道の道明かりであるとされている。昔、火葬には窯を使った。そして薪を燃やしてガ

イを焼いた。そのためガイが骨になるまでには4、5時間と長い時間がかかった。

火葬を行なっている間に、係の女の人はごちそうやお酒を火葬場まで持っていった。遺族は頃合いをみて火葬場まで出向き、おんぼさんのことを労い、お骨を拾った。このことを「のぞきに行く」とか「ノウミマイ」などと呼んだ。みまいにいくとお骨が早くあがるとされていた。

受け取ったお骨のうち頭骨とのどぼとけの骨は小さいお骨いれに入れられた。このお骨は浄土真宗だと京都本願寺の方へ、禅宗だと総持寺の方へ納骨された。

火葬のあとは家に戻りお骨にお経をあげてもらった。そして住職さんを含めたみんなに御膳を振舞った。精進料理でもてなしをした。おんぼさんも亡くなった人の家に戻りそこでお風呂に入って新しい服に着替え、御膳をいただいた。

法要

葬が終わったあとは7日ごとに四十九日まで法要を行なった（お経をあげてもらう）。四十九日には濃い親戚や近所の人を招待してお経をあげてもらう。法要のあとは皆に精進料理を振舞った。これをよびしという。

そして3年で三回忌を迎える。家によっては七周忌、十三回忌、二十三回忌、三十三回忌、五十回忌と行なう。

3. 黒島地区の葬儀

黒島地区と道下地区は非常に近い位置にあるので、黒島地区における葬儀も、道下地区と手順を共にするところが多い。黒島地区の葬儀については道下地区の葬儀の進行と照らし合わせながら、Eさん（75歳女性）から聞いた話を中心に、黒島地区の方々のお話を参考に書かせていただく。黒島地区においても人が亡くなった直後は米を持って行って、檀家の寺まで死者が出たことを知らせにいった。そしてお坊さんに出向いてもらい、枕経を読んでもらった。亡くなった直後、遺体は北枕に寝かされ、顔には白いガーゼがかけられた。布団の上には魔よけのために刃物が置かれ、小さい屏風も逆さまにして置かれた。近くの間にはロウソクと線香を立て、柵を飾った。そして、親族が一人だけ遺体に着せるための白い着物を縫った。着物を縫うとき、結び目を作ってはいけなかった。これは死者が冥土に行くのを引き止めてしまうという考え方からである。

また、亡くなってすぐ女の人は料理作りに取り掛かった。料理はカジメを煮たものや、かしわをいれた最中、豆腐の精進料理、にしめ、がんずわい（大根、豆腐、にんじんを煮たもの）くろもと豆腐の澄まし汁、納豆汁などである。これらの料理は火葬場に持っていったりお葬式の後に食べたりした。

お通夜の前の弔いに行く場合、訪問してよい時間は朝7時からと決められている。夕方は5時までというのも決めてある。弔いの際には100円を持っていった。そしてお参りや焼香を行なった。本当の親友や濃い親戚などは死者の顔だけ見て帰った。

黒島地区でもユイガンを行なった。「ユイガン」とも呼ぶようである。そして身内の者が遺体をアルコールで拭き、綺麗にした。また、「おかみそり」と言ってお寺さんが遺体の毛を剃ったりもした。その後遺体をお棺に入れた。お棺はやはりたる型の座棺である。このとき道下地区とは違ってボロ着を着たりはしていなかった。そして遺体が寝ていた布団や寝巻きは浜で燃やした。Fさん(83歳男性)によれば、このユイガンのときに身内の者は遺体を触っているため穢れているとされ、その穢れが移るという理由から、身内の者は料理を作ったりしないそうだ。料理は親戚が作り、身内の者は作ってもらったものを食べる。

お通夜

葬儀は「お通夜」「本葬」「火葬」の流れで進行していく。黒島地区でも通夜の前には四花を用意し、白蓮や金蓮を用意した。この蓮の量は、お金によって変わってくるそうである。これらの備品は昔も葬儀屋さんにお問い合わせして調達をした。

葬儀を行なう場所は、昔は家か寺が主であった。黒島地区の家もふすまを取ると広い一間になり、冠婚葬祭に使うことが出来る造りの家が主であった。

お通夜のときの焼香は黒島地区でもまわし焼香である。「焼香まわし」とも呼ぶようである。お盆に焼香に使う道具一式を乗せ、出席者にまわしていった。やはりこのとき、焼香後お盆に100円を置いた。これを「裸銭」と呼ぶ。お経が終わったあとは出席者にお茶やお菓子を振舞った。このお茶やお菓子は、今では持ち帰ってもらうことが多い。

夜は身内の者がロウソクと線香を絶やさぬよう一晩中起きているので、おにぎりとお漬物と上に書いた用意した料理を出した。

本葬

本葬のときの住職さんは大抵黒島の三ヶ寺(福善寺、名願寺、永法寺)から最低3人は呼ばれた。福善寺は「たかのごぼ」、名願寺は「なかのごぼ」、永法寺は「したのごぼ」などとも呼ばれるようである。それぞれの寺がある場所によってこのように呼ばれている。黒島の家で福善寺の檀家は200軒ほど、名願寺の檀家は100軒ほどだそうである。諷経のお坊さんとしては、女の人が嫁ぐ前の村の寺の人を呼んだりした。

香典は7000円以上がお返しをする基準である。しかし5000円の人の中にはいる。香典返しは今までは砂糖や昆布やまんじゅうであった。香典が1万円以上のひとには赤飯を返した。今はビ

ール券2、3枚など家によっていろいろである。

喪主は故人に最も近い人である。喪主だけは白い着物や袴を着たりした。そしてお坊さんがお経を読み焼香をするのだが、本葬のときはまわし焼香は行なわず、祭壇の前に行って焼香を行なう。

焼香のあとには「のざらい」というものが行なわれた。のざらいでは来客者は全員家の中でスリッパをはき、カサを用意した。このとき一般の人は衣を着ているのだが、住職は特別な格好をした。人形のついたカサを使ったりした。こののざらいは道下地区のように家でのお経あげ→外でのお経あげという流れが簡略化したものではないかと思われる。

その後火葬のため遺体を外に出す。このとき遺体は玄関から出さずに、窓からだす。しかし現在公民館で行なう場合は玄関から出す。お棺は親戚の若い人皆で担いで歩いて火葬場まで持っていった。火葬場は福善寺などのお墓の奥にあった。親近者の女の人はここまで白い着物に草履をはいた格好であるのだが、ここで草履を脱いだ。黒島地区では、遺体を焼く係は親戚の人に頼んだ。その人数は1、2人ほどである。そして、火葬場には予め作っておいた料理を持っていった。

お骨は木箱に入れられ、多くは四十九日の後お墓に入れられた。指先のものや小さい仏の形をした骨は別にされ、ほとんどの人は京都にある浄土真宗本山の東本願寺に納骨する。そのため生きている頃から「京都の大仏の下に入りたい」と口にする人も多いそうである。納骨する権利はお金を払ってもらっていて、10万以上する。本願寺へ納骨に行った際に多くの人は法名をもらってくる。これも10万20万ほどする。黒島地区は主に浄土真宗であるので、位牌の代わりに「わきがけさま」といって法名を書いた掛け軸を仏壇の中に飾る。本願寺への納骨の習慣は現在も続いているが、遠くて大変だからという理由で、近くにある本すい寺に納骨していく人や地元のお墓に全ての骨を入れてしまう人もいる。

本葬のあとは用意していた夕食をいただいた。これを「ちゅうえん」と呼ぶ。この夕食は今では折り詰めで出すことが多いが、お葬式は正確な人数が把握できないため、折り詰めは多く用意しなくてはならず残ってしまい不便なところがある。その点作ったものであれば、残すこともなく効率的である。しかし料理を作ることは、人手が足りないため出来なかつたりする。

法要

葬式の次の日にもお参りが行なわれ、親戚にお礼参りが行なわれた。そしてその後四十九日まではずっと、「七日づとめ」が行なわれる。お寺さんが7日ごとにお参りにくる。これはあの世につくまでに49日かかるから行なうのではないかとされている。四十九日のときは濃い親戚が集まりお参りをする程度であった。お砂糖を配ったとの話も聞いたが、定かではないようだ。道下地区と違い、料理を振舞ったりはしなかったようだ。Eさんによれば、儀礼では道下地区の方が

派手なところがあるという。このような四十九日の違いや、手土産を持っていくことが多いところが黒島地区と違うところであるとのことである。

3. 現代における変化

道下地区

4、5年ほど前から葬儀の運営は農協か葬儀屋に任せるようになった。農協（JA おおぞら）は門前、輪島、穴水、奥能登が合併して出来たもので、葬儀の仕事を行なってくれる。また、葬儀屋というのは「たかはしさん」のことを言う。たかはしさんは元々農協に務めていたのだが、独立して葬儀の世話を行なってくれるようになった。ライフサービスたかはし多目的ホール葬儀場も運営している。祭壇の用意やガイの布団の始末やらも農協かたかはしさんに頼む。現在農協：たかはしさん＝1：2の割合で葬儀の運営を頼まれている。

葬儀の場所も公民館で行なうことが主流になった。理由としては家の家具をどかさず作業が年寄りばかりで難しくなったことや、公民館のほうが安い金額で済み、駐車場もあり設備も便利ということなどが挙げられる。そして、地震による家の建て替えというのも理由の一つである。地震の後で建てた新しい家を、昔ながらの戸をはずすと大広間になるような、昔ながらの家の作りに建て替えることが難しく、大人数が一つの場に集まれないような家の作りで建て替えることが多いためである。

また、現在家で行う場合、昼は料理を振舞うことが多いが、夜になるとお経をあげて夜ご飯を持って帰ってもらうことが多い。昼の料理もお弁当などの場合がある。現在、その他にも折り詰め、缶ビール、ワンカップのお酒などを渡してもって帰ってもらう。

香典は現在お金で用意する。ひつ代として5000円を渡すのが一般的で、親戚などは1万円、濃い親戚は2、3万円を用意するのが普通である。

内葬礼の場所から火葬場に移動する際、野葬礼を行なうことはなくなった。今ではガイを葬儀車に乗せ、あとの人はバスで火葬場まで移動する。料理は折り詰めの弁当を用意し、女の方はビールを用意する。そして火葬場の和室で昼食をとる。お骨があがる時間も1、2時間と速い。家に帰ってお経をあげ、親戚の人たちと食べる料理は御膳ではなく、テーブルで折り詰めやビールをいただく。

四十九日の法要は今も昔も家で行っているが、その後のよびしは料理屋に行くことが主になった。大体の人は門前の「まるやま」という料理屋かビューサンセットの第3セクターを利用する。

黒島地区

黒島地区でも葬儀を行なう場所は家か寺ではなくなり、公民館が主になった。現在 8 割が公民館で葬儀を行なうようで、1 割が農協で、残り 1 割が自宅で行なうようである。公民館で葬儀を行なう家は多い年で 10 軒ほど、少なくとも 3 軒ほどはあるという。G さん（68 歳男性）から公民館について詳しく話してもらった。公民館としては、特定の個人や宗教・宗派の便宜をはかつてはいけないと法律で禁止されているので、葬式で場所を貸すときは黒島地区のコミュニティセンターであるという建前を用いる。公民館は全ての宗教・宗派に開放しており、1 回につき 3 万円ほどの使用量を取る。このお金は市の教育委員会に納める。ちなみに、農協会館の大きい場所を使用すると 100 万円ほどかかり、狭いところでも何十万かはするようである。公民館を使うようになった理由としては、ご老人ばかりで家での葬儀が難儀であることや、黒島の寺院には駐車場がなく不便なこと、セレモニーホールがないことなどが挙げられる。祭壇などは農協やたかはしさん、またはナカヤマさんから借りる。ナカヤマさんは仙台の人で、門前で葬儀店を営んでいるようである。F さんが子供の頃はこのナカヤマさんで祭壇を借りることが主だったようである。

亡くなった人の着物を縫うという習慣もなくなり、火葬場までも霊柩車で行くようになった。今は穴水の火葬場までいく。しかし四十九日の中には、今まではしていなかったが、お参りのあと皆で食事を取るようになった。主にビューサンセットを利用する人が多い。

また、黒島地区では 12、3 年前から生活改善運動が行なわれ、年々派手になる争議の費用、労力を抑えようとする試みがあった。その内容としては、香典のお返しを黒島の人には砂糖、遠くから来た人にはビール券で返すこと、手作りで用意した料理を弁当にすること、お茶はペットボトルのもので済ますこと、お寺さんのかごもり（フルーツを入れたお供え）はなしにすること、などであった。この試みによりただ葬式を質素にしようとするというわけではなく、根底には相互扶助、思いやりの心がある。この運動は 3 年ごとに見直しを決めていた。しかし、その見直しは行なわれているかどうかわからないし、この生活改善の項目も守られていないところもある。

5. おわりに

今回黒島・道下地区の葬儀について詳しく知ることが出来たのはとても貴重なことであったと思う。今回は黒島・道下地区での葬儀手順の違い、そして過去と現在の葬儀手順の違いについてしか述べてないが、もっとほかの地域との葬儀形式の違いについて調べて比べてみるのも面白いのではないかと思った。

最後に、今回この報告書を書くにあたって協力していただいた皆さんに厚くお礼を申し上げて終わりとさせていただきます。